津本陽

修羅の剣

(下)

修羅の剣(下)
津本陽
© Yo Tsumoto 1989

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1989年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184564-0

86260

日文701442102

文庫

修羅の剣 (下)

津本 陽

大阪外国語学校図書館
藏书

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本講談社科学協会

目次

おまき　七
桂小五郎　八九
赤城おろし　一四三
京の雨　二一九
解説　磯貝勝太郎　二八五
年譜　二九一

此为试读；需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

修羅の剣（下）

おまき

蒸し暑い風が土間に吹きこみ、戸障子をしきりに鳴らしていた。

昼間であるのに家内は日暮れどきのようにほのぐらく、軒下の羽目板に砂をたたきつけるような音が、たえず聞えていた。

江戸名物の空っ風が吹きあれているのである。空っ風は土くじりともいわれ、雲もない晴天で平穏な日に、不意に地面から吹きあがる突風のことである。

はげしいいきおいで土を捲きあげ、空へ吹きたてるので、遠見には大火災の黒烟のようであった。

日光もさえぎるほどの土煙であるから、しばしば大火事がおこったと見あやまるわけであった。

嘉永四年（一八五一）五月も末ちかい日の午後であった。仏生寺弥助は練兵館の塾の自室で、韮山からひさしぶりに江戸に出てきた柏木荘蔵と、徳利の酒をくみかわしていた。

二人が武州から上州への武者修行の旅に出て、深谷宿血洗島の渋沢宗助道場の新築披露試合に参加したときから、はやくも二年が経っていた。

柏木はまえの年に韮山に帰り、代官江川太郎左衛門のもとで元締手代の要職をつとめている。太郎左衛門にすすめられ、近々に蘭学、砲術の習得に長崎表へ留学することとなっていた。江戸へは代官所の公用で出張してきたのである。

「柏木さんは偉い人になるんですな」

茶碗酒を呑みほし、干魚をかじりつつ弥助がいう。

「どうしてだ」

「漢学にくわしいうえに、なおオランダの文字まで学ばれるのですからね。私からみれば、神業ですよ」

「なにをいう、お主は武士になるのがいやだから読み書きを習わぬと、公言しているではないか。その気になれば学問を身につけられるのだろう」

弥助は吐息をつき、眼を宙にすえる。

「柏木さん、私も斎藤先生のように頭がよければ、とっくに文字を覚えていますよ。ところがもの覚えがわるいので、どうしても筆を持つ気になれません。いまではあきらめましたよ」

柏木は頭をゆっくりと左右に振った。

「いや、考えてみればもったいない話だ。オランダ、エンゲレス、メリケンなどの外国が通商をうながしてきている。風雲ただならぬ世に、お主のような稀代の剣術遣いが練兵館助教のまま、

くすぶっているとはな。お主が多少の学問を身につけてさえおれば、諸大名はあらそって撃剣師範に召抱えにくるものを」

「いや、私はこのままでけっこうですがね。剣術のおかげで食いっぱぐれることもなく、気随気儘に日送りをできるのですから」

二十一歳になった弥助は、柏木が韮山へ帰ってからまもなく、塾を出て、下谷の裏店を借りうけ、おまきと住んでいた。

弥助はおまきを妻に迎えたいと師の弥九郎に申し出たとき、はねつけられた。

「お前は儂の申しつけに背いてばかりいるが、またしても勝手なふるまいをいたすつもりだな。おまきはよい娘だが、お前の嫁にするのは不承知だ」

弥九郎は、弥助をなんとか周旋して、大名家の師範役に仕官させてやろうと、考えていた。

自分の姓名をも書けない無学が災いして、いままで助教にとどまっているが、剣の技倆は、剣客が雲のように集っている江戸でも、最高の域に達している。

これほどの天才を、しかるべき家中の師範役として活躍させないのは、いかにももったいないと弥九郎は思う。

外国からの通商要求が幕府にあいつぎ、世情騒然としている折柄のことである。諸大名は家中の士の武芸鍛練を奨励していた。

弥助に読み書きをなんとか仕込み、出世させたいと思案を練っているときに、おまきを嫁にしたいとは慮外の沙汰であると、弥九郎は怒った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おまきは利発者だが、寺子屋に通ったことがなく、弥助同様ほとんど文字を知らない。彼女を妻にすれば、弥助の出世の見込みは、いまよりもなお薄れる。

だが弥助は、弥九郎の意に反して練兵館のそとに一戸を借りうけ、祝言をもしないままに、おまきと暮らしはじめたのである。

破門すると激昂する弥九郎を、ご隠居先生がなだめた。

「いいではないか。あのような変物が、一人くらいいてもおもしろかろう。他の弟子であれば、練兵館主人が出世のいとぐちをつけてやろうといえば、よろこび勇み、尾を振ってついてくるわさ。それを、弥助は袖にした。出世するよりも、気随に世渡りをしたいというのは、あいつの天性というものだよ。このまま練兵館に置いておき、役立つ男なら、いささかの気儘を見逃してやることだ」

弥九郎も、弥助のおどろくべき実力を認めている。

弥助が助教であるというだけで、練兵館に他流試合を申しこんでくる修行者の数が減っている。道場の名声が盤石のようにゆるがないのは、弥助の実力が多分にあずかってのことであった。

江戸の剣術家のあいだでは、弥助の名は知れわたっている。

半年ほどまえ、練兵館へ他流試合を申しこんできた、常陸笠間藩小松恒三郎と立ちあい、完膚なきまでにうちやぶった実績が、世間に喧伝されて以来のことである。

小松恒三郎は、香取神道流の達人であった。江戸へ出て、有名道場をおとずれ他流試合を挑ん

で、不敗の実績を誇っている強豪である。
香取神道流は竹刀稽古をおこなわず、木刀による組太刀稽古をもっぱらとしていた。
組太刀の型稽古に習熟した者は、剣理にあかるく、間合いの読みに熟達していた。そのため、相手に立つ者は間のうちへ踏みこんだとたん、打ちこまれることになる。
小松が練兵館をおとずれたとき、弥九郎はいつものように伊豆韮山の代官所へ出張して不在であった。
師範代の藤田泰一郎、百合本昇三、野原庄一郎、山田壮治郎らは、弥九郎の長男新太郎とともに、水戸表へ出向いていた。
歓之助は在宅であったが、軽率に立ちあうことはできない。道場で稽古していた門弟のうち主だった者が挨拶をした。
「せっかくご来場いただきましたが、あいにく当方の師範代は、そろって他出しておりますゆえ、日をあらためお越し下さい」
小松はうなずいて答えた。
「仰せにしたがい、明日あらためて参りたいが、明朝には笠間へ帰らねばなりませぬ。ついては、せっかくお訪ねしたことでもあり、尊公がたに一手、立ちあいをお願いいたしたい」
丁重に申しこまれると、ことわるわけにもいかない。
門弟たちは小松を道場に迎え、立ちあってみてたちまちすくみあがった。七、八人の古参者が竹刀をまじえたが、いずれも一合も打ちあわせないままに、眼から火花の散るような猛打を浴び

せられたのである。
前に出ても、退いても、自在に打たれ、骨が砕けたかと思うほどの疼痛に、歯をくいしばって堪えねばならない。
小松は汗もかいていない様子で、面をはずすこともなく、道場正面の上段の間を背に、傲然と立ちはだかっていた。
弟子たちはようやく、小松の挑戦に応じたのが軽率であったと気づいたが、もう遅かった。このまま帰られては、練兵館の道場破りをしたといいふらされても、しかたがない。
「どうする、歓之助様をお呼びするか。それともご隠居先生にお知らせしようか」
門弟たちは額をあつめ相談するうち、弥助が屋敷うちにいるかも知れないと思いついた。
弥助はこの頃稽古に熱心ではなく、練兵館に姿をみせない日が多かった。だが、念のためにと塾へかけつけると、彼が自室で寝ころんでいたのである。
弥助は小松と立ちあってほしいと頼まれると、門弟よりはやく部屋を飛びだした。彼は遠慮なく腕をふるえる他流試合が、楽しみであった。
二十六、七歳の年頃にみえる小松は、稽古で鍛えぬいたらしい、贅肉のない体格であった。
「拙者は当道場助教、仏生寺弥助と申す。では一手お相手つかまつる」
弥助の口上を聞くと、小松は表情をひきしめる。かねて弥助の異能を聞き知っていたのである。彼は闘志をみなぎらせ、申しいれる。
「仏生寺殿、十本勝負をお願いいたす」

「心得ました」

十本勝負をおこなえば、たがいの実力がはっきりとあらわれる。

一本や二本をやり損じても、実力のうわまわるほうが、かならず過半を制するのである。

小松は中段青眼に構えた。弥助はためらうこともなく左上段に竹刀をふりかぶり、そのまま間合いを詰めてゆく。

小松が小手を打とうと身を沈めかけたとき、弥助はおおきく踏みこみ、全身の力をこめて面をうちこんだ。

「うむ、仕損じたか」

小松は両眼から青い火花を散らせ、頭蓋の奥までこたえる強烈な打撃のいたみに耐える。

「出ばなを打たれたのだ。やはり噂通りの妙手だな、仏生寺は。二本めは用心してかからねばならぬ」

小松は平生、上段からの攻めを凌ぐのが得意であった。

上段からは面か小手を打ってくるのが定石である。胴打ちは決めにくいうえ、実戦には通用しにくい廻し打ちなので、軽んじられている。

最初の打ちこみさえはずせば、勝負は貰ったも同然だと、小松は間合いをひろくとり、高めの青眼で注意ぶかく前へ出る。

一歩踏みだして打てば、たがいの体に剣尖がとどく、一足一刀の間合いに達したとき、弥助の体が急に眼前にひろがり、脳天に鉄棒で打たれるような衝撃を感じた。

「参った。お見事でござった」
小松には、まだ弥助を褒める余裕が残っているかに見えたが、内実は虚勢を張っただけである。
彼はどうしていいか分らないと、動転していた。
対抗する技を、思いつかないのである。弥助はケレンめいた技巧を弄してはいない。あくまでも左上段からの面に固執しているのみで、芸がないとさえいえる。
そうであるのに、小松の防禦はまったく効果なく、うちやぶられたのである。
「こやつめ、こんどはそうはいかぬぞ」
笠間の虎と異名をとる小松は、敵愾心をふるいおこす。
三本めは相上段にとった。
弥助はこんども平然と前に出た。間合いを詰めたかと見る間に、判で捺したような左片手打ちが飛ぶ。
脳天の刺子を打つ間の抜けた音がして、笠間の虎は三本めの面をとられた。
「まだ七本ある」
四本めは下段にとった。
弥助の打ちこむ竹刀を下からはねあげ、車にまわして面を打ちかえそうという作戦である。
だが、小松が下段の剣尖をはねあげようとするまえに、弥助の面はきまっていた。
弥助のあやつる竹刀の動きは、さほど速いともみえないのに、まったく小松の抵抗を許さな

い。

弥助は防具の乱れもなく、呼吸をはずませてもいないが、小松は面のそとまで聞える荒い息をついている。

五本、六本、七本、左上段からの面ばかりを決められたが、小松はひきさがらなかった。一本でも取りかえさねばならないと、彼は死にものぐるいに掛かっていった。

頭上に竹刀を横たえ、体当りを敢行する。両片手横面を連打して突っこんでゆく。思いつくかぎりの技を使ってみたが、ついに十本とも、左上段からの面をとられ、完全に敗北した。

小松は面をはずしたとき、顔に滝のような汗を流し、生色がなかった。彼は弥助の格段の技倆に、うちのめされたのである。

弥助の名はあがったが、彼の暮らしむきはその後も変ってはいない。練兵館の師範代にもなれず、助教の地位にとどまっている。

彼はおまきと世帯を持ったのち、金には窮していない。嚢中は常にゆたかであった。諸方の道場の用心棒をつとめ稼いでいるのである。江戸市中に剣術道場の数は多く、腕の冴えにいまひとつ乏しい道場主も、めずらしくはない。

弥助はそのような道場に、他流試合を望む武者修行の士がきたとき、主にかわって相手をして、礼金を申しうける。

内職の機会は、案外に多かった。江戸での仕事がすくないときは、近在の武州、房州あたりにまでかけてゆく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com